

# 中将姫伝承の一考察

## A Study of Folklore "Chu-jo-hime"

Keywords: Taima Temple, Mandala, Chu-jo-hime, Chu-jo-Sanekata, The Kumano Shrine

キーワード: 当麻寺、曼荼羅、中将姫、実方中将、熊野神社

岩下 均

HITOSHI IWASHITA

### 第一章 中将姫伝承の発生と展開

#### 第一節 謡曲『当麻』と中将姫

「此ノ能、仕にくき事、古へより名人上手も申されし」(『隣忠秘抄』)と言われる謡曲『当麻』(世阿弥作)は、演者にとつて至難の曲という。梅若万三郎の、そのような「当麻」を観た小林秀雄は、「それは歴史の泥中から咲き出た花」「世阿弥の〈花〉は秘められてゐる、確かに」(『無常といふ事』一九三七)と、絶賛している。

念仏廻国の行者一行(ワキ)が紀州三熊野に参り、その帰途、大和路から「二上山の麓なる当麻の寺」に詣でた。僧の前に「老尼」(前シテ。姥面・花帽子着流姿・手に杖)と、腰元らしい「若い女」(ツレ。小面・唐織着流)が通りかかる。僧の尋ねに応じた老尼は、当麻寺の由来や、蓮糸を濯いだ染殿之井、その糸を架け干した糸懸

桜のことなどを述べる。淳仁天皇(七三三〜七六五、その母は当麻山背女である)の御世「横佩の右大臣豊成の御息女中将姫」が「称賛浄土経」を毎日読誦し「生身の弥陀来迎」を祈念、念仏三昧の定に入る。ある夜半、「化尼」の姿の弥陀が来迎したことを語る。折しも今日は二月中の五日彼岸の中日で、実は、いにしえの「化尼」「化女」が法事(仏法の行事)のためにやってきたのだと述べ、上天する(中人)。やがて「所の者」(アイ)が登場し、僧に曼荼羅のいわれを話す。姫は「継母の計らひ」で「雲雀山に捨てられ」たが、偶然、狩で雲雀山を訪れた父に発見される。都に連れ帰ろうとする父に、姫はこのまま当麻寺で「御髪を下し」たいと望む。その後(法如と号した『当麻曼荼羅縁起』)姫は「阿弥陀如来を拜み給ひ、末世の衆生済度のため奇特を残し給へ」と願うと、「蓮の糸に

て極楽の妙像を曼荼羅マントラに織り現し、中将姫に与へ」と語る。僧は、先ほどの老尼・若女のことを語ると、「さては疑ひもなく中将姫現れ給ひたる」と土地の者は感動する（実は阿弥陀如来の化身化身）。僧は、なおも奇特を待っている、中将姫の精魂（後シテ。増あるいは小面・白蓮の天冠・右手に扇・左手に経巻・緋大口・舞衣または長絹）が現れ、念仏のお蔭で《女人往生》できたことを述べ、早舞を舞う。やがて後夜の勤行と思ううちに、夜は白々と明け、僧の夢は覚める。

## 第二節 民俗無形文化財「当麻れんぞ」

二上山にじょうせん禅林寺當麻（当麻）寺の寺伝によれば、用命天皇の皇子で聖徳太子の弟、麻呂子親王が推古天皇二十年（六一二）に河内に建立した萬法藏院を、七〇年ほど後の天武十年（六八一）、孫の当麻国見が移したもので、弥勒菩薩を本尊とした。この地の豪族、当麻氏の氏寺だったが、本堂に祀られた「観無量寿経浄土変相図」いわゆる蓮糸で織られたという「當麻曼荼羅」（国宝。調査では絹糸の綴れ織りと判明）は、平安期より信仰を集め、現在では当麻寺の本尊となっている。その後、治承四年（一一八〇）の平家南都攻略で堂宇も消失したが、源頼朝の寄進で再興された。その背景には、浄土教徒の篤い力が大きく働いたようである。現在の当麻寺も、真言宗五院と、浄土宗二院の塔頭の輪番で維持管理されている。

現在、五月十四日の午後四時から二九歳で往生したと伝える中将姫の様子を再現した国指定無形民俗文化財「当麻のお練」「当麻れ

んぞ」「二十五菩薩来迎会」の練供養式が行われている（以前は旧暦三月十四日）。一〇〇五年に恵心僧都源信が始めてから、今年で一〇〇九回目（広報『かつらぎ』二〇一三・六）だという。すなわち、天童（稚児）を先頭に、二十二菩薩が介添えに手を引かれ、極楽界に見立てた本堂（曼荼羅堂）から娑婆堂（人間界）へと来迎橋（特設の橋。高さ一メートル、幅一・五メートル、距離約二二〇メートル）を練り渡る。続いて観世音菩薩が、勢至菩薩・普賢菩薩（以上で二十五菩薩）とともに空の蓮台を捧げて娑婆堂に渡り、中将姫（阿弥陀如来の化身）の小像をその蓮台に乗せ、諸菩薩（講員は世襲）・僧侶を従えて本堂（極楽界）に戻っていく。約一時間の行事が終わるその頃、二上山の間の鞍部（たわ）に夕陽が沈んでいく。「れんぞ」（レンドとも）とは、諺に《レンゾの餅が苦い》というように、この日を境に田植えの苦しい労働が始まる、その前の野良仕事の「休み日」のことである。会式の二十五菩薩に扮することのできるのは、菩薩講（現在二〇組二百軒の講員）の男性でもあるから、その語源は「練道」であろう。

奈良市ならまちには「中将姫誕生地」あるいは「その墓」と伝える寺が散見する。誕生寺（三棟町）・高林寺（井上町）・徳融寺（鳴川町）などである。また当麻寺付近の石光寺せきこうじ（染寺とも。当麻町染野）にも蓮糸を五色に染めたという井戸、「中将姫の墓」と伝える十三重塔（鎌倉時代）も伝えられる。

### 第三節 中将姫伝承の歴史的展開

近藤雅尚の歴史的 analysis によれば、《中将姫伝承》の記録初見は、鎌倉時代、后宮の大和社寺巡礼に同行した興福寺僧、実叡の『建久御巡礼記』（一一九二）である。横佩大納言の娘が願立してしたこと、一化人が現れ、蓮糸で浄土変相を一夜にして織り上げて去ったこと、娘はこれに向かつて祈り続け、極楽往生を遂げたことが当麻寺僧によって語られたことを記す。この《蓮糸織成説話》が、最も素朴な姿であったようである。

やがて九条家本『当麻寺流記』（一二三二）に至ると、より詳細に語られるようになる。すなわち、曼荼羅の本願は「正二位横佩右大臣尹統息女。字ハ中将」で、姫は「称賛浄土教一千卷」を書写したこと、姫の念願に応じ「尼公」が出現、蓮糸を用意させ、「織女」（観音の化身）も出現し「夜中三時」の間に「方一丈五尺」の曼荼羅を織ったこと、尼公が去るにあたり、四句の偈を唱えるとき、姫は光仁天皇の「宝亀六年（七七五）三月十四日」に往生したことを伝える。ここに至って、『曼荼羅説話』から、『中将姫往生譚』への大綱が成立したといえよう。なお、禅林寺本『和州当麻寺極楽曼荼羅縁起』では、姫の父を、後の主流となる「藤原豊成」としている点が注目される。

室町時代に至ると、西誉聖聡『当麻曼荼羅疏』（一四三六『浄土宗全書』所収）で、姫の出家以前の物語として女人受難・救済の《継子譚》的要素が加わる。すなわち「横佩右大臣藤原豊成」には子が無く、長谷寺に祈願して姉・弟を儲けたこと（姫は長谷観音の

《申し子》であったことになる。なお、黒川能伝承者は、姫を春日明神の申し子とする<sup>注16</sup>。姫七歳で母が病死すると、左大臣諸房（師房）女を継母としたこと、この先妻の子二人を継母は葛城山の地獄谷に捨てさせるが、帝に救われ、姫十三歳で「中将内侍」に、弟は「少将」となったこと、継母は、なおも紀州鶴山<sup>ひばりやま</sup>で姫を殺させようと図ったが、これも命じられた武士の情けで助けられ、そのまま山中に暮らしたこと、豊成が狩りに来て再会、連れ戻すこと、弟死去のこと、姫、当麻寺に出家のことが語られる。

中世浄土教は、当麻曼荼羅を介した絵解きによる念仏唱導を行っていた（現在も中之坊では、独特の節回しで「当麻曼荼羅絵解き」を行っている）。その過程で、中将姫の伝記を加えることにより、一層民衆の共感と理解を増幅させるよう試みたものであろう。あるいはまた『当麻曼荼羅』が描く『観無量寿経』中の「韋提希夫人の受難と仏による救済」を、発願者中将姫に重ね合わせたいという絵解き唱道者僧の意図があったものとも思われる。

冒頭の謡曲『当麻』にも、この継子譚が取り入れられている。さらに謡曲『雲雀山』（作者不明。雲雀山は、①大和国山辺郡から宇陀へ越える境の山。②紀州日高郡から熊野領に入る古道にある山、の二説がある）では、北の方の讒言を信じた右大臣豊成（ワキ）は、従者に中将姫を殺すよう命じるが、乳母とともに雲雀山に匿われること、姫を思うあまり心乱れ、今は花売りとなった乳母の侍従（シテ）を偶然発見した豊成は、実情を知って前非を悔い、中将姫と再会する。いわゆる「狂女物」だが、一味違う物狂いとなってお

り、中将姫（子方）も、作り物の萩小屋に在るのみで主役ではない。

さて、江戸時代に至ると、説経『中将姫御本地』『中将姫』、浄瑠璃『当麻中将姫』『鷗山姫捨松』（並木宗輔作一七四〇初演）など、さらに複雑化する。並木宗輔名作品の「鷗山」（鷗山）とも書かれる）特に、三段目の切「中将姫雪責め」のサディスティックな場面は、歌舞伎『中将姫古跡の松』（三世河竹新七作。一八八四初演）、『雲雀山駒繫（こまつなぎ）松（まつ）』などにも採り入れられている。そこには、当初の曼荼羅絵解きという念仏信仰布教の目的から、中将姫の《女人往生》に至る人生ドラマへの興味に変化した様子が見て取れよう。それゆえ中将姫一代記としても『中将法女比丘尼伝記』『中将姫行状記』（七巻。一七三〇）などがまとめられ、定着化を見たのである。

#### 第四節 問題点はなにか

以上のように、曼荼羅にまつわる《中将姫伝承》の歴史的・文芸的展開を纏めることができようか。しかしながら、今回の拙稿の目的は、さらにその文芸性を追求しようとするものではない。冒頭に掲げた謡曲『当麻』の中に、実はすでに問題のキーワードが表示されている。すなわち、「念仏の行者」は、なぜ「三熊野詣」の帰途、わざわざ「二上山の麓」にある「当麻寺」に立ち寄り、「中将姫」の霊に出会わなければならないか——という点である。そこには、民俗論理からの「必然性」があるように思われる。その背景を、再

考してみようとするものである。

## 第二章 『万葉集』の二上山と大津の皇子

### 第一節 大津皇子の二上山移葬

奈良県北葛城郡当麻町と大阪府南河内郡太子町との県境にあるのが「二上山」である。『万葉集』では、四首みえ、すべて「ふたかみ」山と詠んでいるが、現在は「にじょう」山と呼ぶ。この点が、冒頭に掲げた謡曲『当麻』も気になったらしく、「二上の嶽とは二上の山とこそ人はいへど、真はこの尼が上りし山なるが故に尼上の嶽とは申すなり」と、わざわざ地名起源説話風に付会している。すでに、当時はニジヨウ山と呼ばれていたからなのである。なお河内では、かつて「ふたご」山とも呼んだという。

大阪をわが越え来れば 二上にもみち葉流る 時雨降りつつ

（⑩秋雑歌・黄葉を詠む四十一首・二二八五）

二上に隠らふ月の 惜しけども 妹が手本を離るるこのころ

（⑪古今相聞往来歌類上・物に寄せて思を陳ぶ・二二六六八）

紀路にこそ妹山ありといへ 玉くしげ二上山も妹こそありけれ

（⑦雑歌・山を詠む七首・一〇九八）

『万葉集』のこれら三首は作者未詳歌である。前者二首は「二上」とだけあるが、内容から「二上山」のことと解釈できる。

二上山は、一首目の歌にあるように、河内から大和に入る「国境の山」であった。たとえば足柄山（足柄の御坂恐こみ）万葉集⑭三三七（一）や、竜田山（このたびは幣もとりあへず手向山（むけやま））百人一首・萱家）など、民俗的にも「境の地」には「道の神」「道祖神」「塞の神」が居り、旅の安全を祈るため「手向け」が行われるのが常であった。これが後世の「歌枕」発生の深層にあったと考えられる。

三首目の、紀路にある妹山とは、「妹背山」（④五四四、⑦一一九三・一二四七）と歌われたその妹山、すなわち和歌山県伊都郡かつらぎ町背ノ山の背ノ山（紀ノ川の北岸）と、対岸のかつらぎ町西渡田の妹山である。大和二上山も言うなれば、雄岳（五四〇メートル）・雌岳（四七四メートル）の《妹背山》である。このような雄岳・雌岳を持つ山は、富山県高岡市と氷見市の間にある「二上山」、茨城県筑波郡の「筑波山」などと同様、民俗的に神聖視された形状の山であった。

さて、もう一首は、天武天皇の娘で伊勢斎宮であった大来皇女の歌に見える。

うつそみの人にある我や 明日よりは二上山を兄弟とわが見む

その詞書には「大津皇子の屍を葛城の二上山に移し葬る時、大来

②挽歌・一六五

皇女、哀傷びて作りませる歌二首」と記す。この「移葬」のことは、『日本書紀』にも記さない『万葉集』のみの記録である。この歌には、続くもう一首の歌があり、注を付している。

磯のうへに生ふる馬酔木を手折らめど 見すべき君がありと言はなかに

右一首、今案ふるに、移し葬る歌に似ず。けだし疑はくは、伊勢斎宮より京に還る時、路のへに花を見て感傷哀咽してこの歌を作るか。

②挽歌・一六六

すなわち『万葉集』編纂者は、公的記録もなく歌も「移葬」の歌らしくないと述べる。だが、見方を変えれば、古記録としての「原資料」を重んじて、そのままに今は記載しておくというのである。

朱鳥元年（六八九）九月九日天武天皇崩御（五六歳）、鵜野皇后（のちの持統女帝）称制。二十四日大津皇子謀反、十月二日謀反発覚逮捕、三日詔語田の家にて賜死（享年二四歳）。父帝の崩御から一ヶ月も経たない事件発覚と即決の処罰だったのに対し、同じ加担者の配流は二十九日であり、謀反を勧めたという新羅僧行心にいたっては、「謀反けむとするに与せれども、朕、罪するに忍びず。飛驒の伽藍に移せ」と極めて軽いものであったのはなぜか。

大津皇子は、天武天皇の第三皇子で、母は皇后と同母姉の大田皇女である。皇位継承権第二位である。しかしその母は、大来（大伯とも書く）皇女七歳、弟大津五歳のときに亡くなっている。大津

は、身体容貌たくましく「詩賦の興り大津より生まれり」（『日本書紀』）とも評される俊才で、勅撰漢詩集『懷風藻』にも四首の詩を残す（内一首は辞世の詩）。一方、皇后を母とする皇太子草壁（日並皇子）は病弱であった。そこに皇位継承をめぐる「悲劇の種」があったのであろう。『万葉集』はその「辞世歌」を伝えている。

大津皇子被死らしめらゆる時、磐余の池の陂にして涕を流して作りませる歌一首

ももづたふ磐余の池に鳴く鴨を 今日のみ見てや雲隠りなむ

右、藤原宮の朱鳥元年冬十月なり。（③挽歌・四一六）

白鳥（日本武尊は没して白鳥と化す。『記』『紀』神話）や、時鳥（あの世から飛来して田植えを促す「死出の田長」『古今集』）などの渡り鳥を、民俗では「靈魂を運ぶもの」として考えていた。鴨もまた同様であろう（「雁の使い」「雁の苞」「雁の文」ともいう）。今、その鴨を見つめながら、皇子は、自らの魂の運命を凝視しているのである。しかし、「雲隠れ」と敬語を使う点や、卷二挽歌（卷一・二は、天武・持統皇統を祝福礼賛する古撰万葉として成立か。）ではなく、卷三挽歌に入れられている点から考えると、あるいは、『辞世歌』ではなく、皇子の気持ちになって別人が詠んだ追悼歌的《歌語り世界》がすでに形成されている一首であった可能性も見るべきであろう。このとき、妻山辺皇女（天智天皇の娘）は、髪を振り乱し、素足のまま駆けつけて殉死し、「見る者皆嘆く」（『日

本書紀』）とも伝える。

実際に二上山に登ってみると、雄岳の山頂に葛木二上神社が南向きに鎮座し、その東の鞍部に大津皇子の墓が、西の河内向きに伝えられる。しかし、はたして昔からそこにあったという確証はない。

櫻井満は、『薬師寺縁起』（『続群書類従』巻第四三五、一九八四復刻版、名著普及会）に、「大津の悪霊が祟りをなし、龍と化したので、二上山東麓登り口に龍峰寺（廃寺）を建てて祀った」と記す点に注目し、皇子の墓はその龍峰寺だったのではないかとする。この点に賛同したい。なお、近年、鳥谷口古墳がそれかとする説もある。

大津没後の持統三年（六八九）四月十三日、突然、皇太子草壁が亡くなった（享年二八）。当然「大津の祟り」と密かに囁かれたことであろう。皇太子草壁から、さらに皇統の軽皇子（後の文武天皇）に災いの及ぶことが懸念されたにちがいない。そこで、おそらく薬師寺完成の文武二年（六九八）前後、その龍峰寺墓地から、さらに国境の二上山山頂へ「移葬」されたのではなかったろうか。しかも、「怨念」を「国中」の大和に向けてはならないよう、大和に背を向け、河内向きに祀ることで、難波の海の向こうから侵入する疫病等を防ぐ《塞の神》として、その「怨念」を利用すること期待してのことだったのではないか。民俗では、恨みを残して亡くなった強力な死者の魂も、手厚く葬ることによって、幸いをもたらすと考えた（盆行事の「施餓鬼会」、平将門の霊を祀る神田明神、菅原道真の霊を祀る天満宮など）いわゆる《御霊信仰》である、言うな

れば、大津皇子の墓を二上山という国境に移葬することで、外からの邪悪霊から大和を守ろうとした《道祖神への転化》的行為の「移葬」だったのではなからうか。

## 第二節 当麻の地と葬送儀礼

二上山の北側の道は「穴虫越え」、南側の道は「竹ノ内越え」と呼ばれ、ともに大和と河内を結んで、難波の海から海外に出入りする重要な幹線道路であった。この地を精査踏歩し尽くした田中日佐夫は、その実感を次のように述べている。<sup>註10</sup>

大和側から竹内峠を越えて、谷間をぬってつづく竹内街道をたどっていくこと約四キロ。河内の平野がようやく姿をあらわし始めたところ、右手にある孝徳天皇の陵側から目の下に広がる平野をながめると、こんもりとした森をいただく小山が、点々と散在することに気がつく。(中略) その小山は、すべて墳墓である。(中略) (現代ノヨウナ住宅モ無ク筆者注) 飛鳥時代の古墳の上には木などなかった当時は白々とした不思議な風景であつたらう。

すなわち、この河内の太子町山田一带は、飛鳥時代の敏達天皇(五七二〜五八四)、その母であり欽明天皇(五三九〜五七一)皇后の石姫皇女の前方後円墳を初めとして、用明天皇(五八五〜五八六)、聖徳太子(五七四〜六二二)、推古天皇(五九二〜六八二)、

孝徳天皇(六四五〜六五四)などの御陵が群れをなして点在する「墳墓の地」であつたのである。ほかにも、伝小野妹子の墓、伝蘇我馬子(？〜六二六)の墓もある。飛鳥の人々にとって、西の果て二上山の向こう側は、「死者の国」「常夜の国」だったのである。

飛鳥の天皇たちの遺体が、二上山の向こう側に埋葬されるためには、「当麻寺」南方の竹内街道を延々一六〜二〇キロメートル、半日以上行程で運ばねばならなかったことになる。その間、おそらく厳肅な儀礼が行われ続けたと思われる。そこで田中日佐夫は、「当麻寺の地」は、その古代葬送儀礼「誄」<sup>ふしのびと</sup>の行われた場であり、当麻氏は、この「誄」を行っていた氏族ではないか、と推測する。<sup>註10</sup>

死者に語りかける「誄」の公式記録の初見は、敏達天皇十四年(五八五)八月であろう。天皇の葬送に際し、大臣蘇我宿禰馬子、物部弓削大連守屋が「誄を奉る」とある。仏教排他の態度をとった物部氏も参加しているので、おそらく仏教以前の古来伝統的な「誄」だったのでなからうか。その後、大化改新(六四五)以降も、誄の記録はない。次に見えるのは、天武天皇(六七二〜六八六)の「殯宮」<sup>もがりのみや</sup>(六八六年九・十一)である。実に四十一年ぶりの復活であるが、この時には「もろもろの僧尼」殯の庭に「発哭(みね)奉る」とあるので、すでに仏教儀礼化が進んだ時代の「誄」に変化したと思われる。

田中日佐夫は、さらに類推する。すなわち、古代「誄」の流れを汲んで、やがて後宮世界を中心として「挽歌」が奉られるようになるのではないか(宮廷歌人額田王、柿本人麻呂ノ系譜。筆者注)と

述べ、そのような後宮世界での追善供養の場で「阿弥陀仏変相図」を用いるようになったからではないか、と述べている。<sup>註10</sup>興味深い説である。

### 第三章 折口信夫『死者の書』の構想と二上山

#### 第一節 折口の構想と日を祀る民俗

国語国文学者・民俗学者、折口信夫（歌人・釈道空）の『死者の書』（一九四三）<sup>註11</sup>は、「彼の人の眠りは、徐々に覚めて行った」と、いきなり死者の目覚めの描写から始まる。

した したした

よみがえる 水の気配。

ああ 耳面刀自。

おれが見たのはただ一度。

しかし あれからずっと

お前を 思い続けていたぞ。

このおれは、一体誰なのだ。

おれは、一体何処にいるのだ。

川本喜八郎監督は、この『死者の書』を、人形アニメーションで初映像化（二〇〇五）した。この詩も川本が、その冒頭部分を詩として脚本化したものである。彼はこの『死者の書』を「明治以降の

日本近代小説の最高の成果」と評してやまない。その梗概を次に示しておこう。

平城京の貴族藤原南家の姫、郎女は「称賛浄土経」を書写し、仏に帰依していた。春彼岸の中日、郎女は二上山の上に「莊嚴な佛人」の姿を見て忘れられず、千部写経を発願する。一年後の春彼岸の中日、終に千部写経を終えると、導かれるように西へ西へとさすらい出て、気づけば二上山の麓、当麻寺に辿り着いていた。当麻の語部媼から郎女は、五十年前に処刑された「滋賀皇子」のこゝとを聴く。皇子は死の直前、一目見た「耳面刀自」への執心から、亡霊となってこの世に留まっていたが、今は郎女が「その人」と映ったのであった。「彷徨える魂」として夜更けに現れる皇子の亡霊は、郎女の「佛人」と重なり、郎女は、その皇子の寒々とした身と心とを被う衣を、と願い、蓮の糸で布を織り始める。

下敷きになっているのは当麻曼荼羅と二上山で、テーマは、生ける者と、非業の死を遂げ、彷徨える精霊「大津皇子」との《魂の交感》である。郎女の、仏教受容による個の意識の目覚めなど、折口信夫博士ならではの古代観と、人間の奥深い執着心、その呪縛からの解放、を表現しようとした作品である。この小説構想の出発点には、大正十一年（一九二二）に書かれた未完の小説「神の嫁」（『白鳥』一〜五）があったとすれば、神を祀る者＝「神の嫁」＝「中将姫」と考えてよいと思われる。

二上山頂の空に現れた莊嚴な姿というの、その創作契機を語る「山越しの阿弥陀像の画因」の論文<sup>註12</sup>に見るごとく、二上山の麓の当



麻寺に伝わる「当麻曼荼羅変相図」に描かれた「阿弥陀仏来迎図」を強く意識したものであったのだろう。中世の念仏信仰には、彼岸の中日に、西の大海原へ没する日輪を拝すれば、阿弥陀仏が現れ、浄土へ導き給うという「日想観」（『観無量寿経』）があった。しかし、それなら《水平線越しの阿弥陀仏来迎図》が、もつとも自然であるが、日本で描かれた来迎図は、どれも《山越しの阿弥陀仏来迎図》になっているのはなぜか。折口の疑問は、この点にあった。結局、日本人の「山越しの阿弥陀仏来迎図」を生み出した背景には、仏教渡来以前にあった日本人の民俗、すなわち「日を拝み、日を祀る信仰」「日祀り信仰」があったためであり、それを仏教に習合させたものが《山越しの来迎図》となったのではないかと折口信夫は結論づけている。<sup>注12</sup>

大和の西の果てに聳える二上山に彼岸中日の夕陽が沈むとき、見事に雄岳と雌岳の間の鞍部に沈んでゆく。それは、さながら西方極楽浄土を観想させたことであろう。二上山の向こう側は、葬送の地であり、「死者の国」<sup>13</sup>「常夜」であるとともに、また「常世」の国<sup>14</sup>「極楽浄土」とも観想されたのであろう。ここに二上山の麓の当麻の地の特色がある。

#### 第四章 もつひとつの中将姫

##### 第一節 陸奥国の中将姫

西行法師に次のような歌がある。

陸奥の国にまかりたりけるに、野の中に常よりもおほしき塚の見えけるを、人に問ひければ「中将の御墓と申すは是が事なり」と申ければ「中将とは誰がことぞ」と、又問ひければ「実方の御事なり」と申ける、いとかなしかりけり。さらぬだに物哀に覚えけるに霜枯れ枯れの薄、ほのほの見えわたりて、のちに語らんも言葉なきやうにおほえて

朽ちもせぬその名ばかりを留め置て 枯野の薄 形見にぞ見る

（『山家集』八〇〇）

自分の浅はかさを恥じ入りつつ、陸奥国で没した古の都の歌人、藤原朝臣実方に思いを馳せる。『新千載集』に採られ、後世「歌枕」として文人の慕った歌枕「形見の薄」の発生である。

芭蕉も『奥の細道』で「笠嶋の郡に入れば、藤中将実方の塚は何処のほどならんと人に問へば」と、旅の目的のひとつでもあったことを記す。しかし「五月雨に道いと悪しく、身疲れはれば、よそながら眺めやりて過る」と諦め、ただ次の句を残している。

笠嶋はいづこ五月のぬかり道

中古三十六歌仙の一人で、百人一首「かくとだに えやは伊吹のさしも草 さしも知らじな燃ゆる思ひを」の歌で知られる藤原実方は、左大臣師尹の孫にあたり、小一条大将濟時を養父として円融・

花山・一条朝を生きた。従四位上左近衛中将でありながら突然、長徳元年（九九五）正月十三日「陸奥守」として現地に赴任するが、わずか三年後の、長徳四年十二月に卒した。その出来事は都人を驚かせ、さまざまな憶測も生む。たとえば、一条天皇の時、殿上で藤原行成と口論し、その冠を払い落とすという狼藉をしたところを帝に見られ「歌枕見てまいれ」と陸奥に追い遣られた（『古事談』巻二・三三）とする。この点については、筆者もかつて論じたことがある<sup>註3</sup>。すなわち、『月刈藻集』上巻に、紀貫之の説話として、初めは紀貫之であったが、冠を落としたのを見た上達部達が「貫之が貫之になった」と笑ったという説話に着目、「貫方」説話にも、その文字遊びが応用されての説話発生ではないか、その背景には、都びとの《歌枕憧憬》が生じ始めていたためと論じた。

その中将実方が亡くなったのは、塩手・笠島二村の境にあった道祖神（宮城県名取市愛島笠島）の前を、下馬せず通過しようとした「崇り」であったという（『源平盛衰記』七巻）。その墓は「形見の薄」の奥、昼なお薄暗い竹藪の中にあつた（名取市塩手）。

さて、都でこの中将実方の訃報に接した娘の「中将姫（十六夜姫）」は、嘆き慕いつつ、苦しい旅をしながら、歌枕「阿古屋の松」のある山形県千歳山（山形県南東方四七二メートル）までやってきたという。中将実方の娘であるから中将姫というわけだが、平清水の川を渡ったときに中将姫は、旅籠れのわが身を水に映し見る。

いかにせむ うつる姿は九十九髪 わが面影は 恥しの川

（平清水千秋・公宣『千歳山萬松寺寺誌』一九八四）

『伊勢物語』の九十九髪（六三段）や、『大和物語』一五五段で、攫われて陸奥国まで流離った都の女が、浅香山の井にわが身を映し見て、衰毫を嘆く姿が想起されよう。

浅香山 かげさへ見ゆる山の井の 浅くは人を思ふものかは

その後、中将実方の娘中将姫は、平清水（山形県滝山）の長者の家に逗留し、長元九年（一〇三六）丙子三月十五日（一方、当麻曼茶羅の中将姫は三月十四日の一日違いであった）に亡くなり、千歳山に葬られたという。今、千歳山に登ると、姫の携えてきた黒岩稲荷社もある。寺伝では、姫の「形見の黄金の鶏」を埋めたゆえ「鶏山」とも言ったという。

歌枕を求めて陸奥国を彷徨したとされる実方であったが、「阿古屋の松」だけが見つかからないまま、笠島道祖神の前で十月十四日（十一月十三日とも）辞世歌を残して亡くなったと伝える（戒名、中心院殿善等實方大居士）。

陸奥の阿古屋の松を尋ね侘び 身は朽ち人となるぞかなしき

（『千歳山萬松寺寺誌』）

## 第二節 豊成女とする阿古屋姫

この歌枕「阿古屋の松」について萬松寺には「阿古屋姫」の伝承もある。

阿古屋姫は、孝徳天皇の白鳳（白雉）元年（六五〇）壬申八月二日生まれで、父は天武朝に左遷され出羽国信夫の里に移り住んだ藤原豊成（豊充とも）であるという。すなわち、当麻曼茶羅の中將姫と阿古屋姫は、その出自を同じくするという奇妙な一致をみせているのである。ある夜、阿古屋姫が琴を演奏していると、美青年が現れ、柴垣越しに笛を合わせる。青年は名取左衛門太郎と名乗ったが、実は千歳山の老松の精であった。折しも名取川の洪水で橋が流され、この老松が用材として切られることになる。ところが、切っても翌日にはまた切り口がふさがっている。そこで占うと、切り屑を焼きつつ切ると良い、という託宣で、やっと切り倒すことができたが、今度は動かない。そこで阿古屋姫が、慰めの詞をかけながら（「囁き峠」の地名由来）引き綱を手にすると、今度はスルスルと動いたという。この木の菩提を弔うため、千歳山に姫が植えたのが「阿古屋の松」ということである。阿古屋姫は慶雲四年（七〇七）丁未二月十六日（一方、当麻曼茶羅の中將姫は三月十四日であった）に、千歳山の庵で没したという（享年三十四）。戒名「萬松寺殿眞操貞幹將基法尼」、辞世歌は、

消し世の跡問ふ松の末かけて 名のみは千々の秋の月かけ

現在、時代が異なるにもかかわらず、阿古屋姫の墓も萬松寺境内（山形市平清水）に移葬され、左から中將姫（十六夜姫）・中將実方・阿古屋姫が三基並んで祀られている。この「もう一人の中將姫」と「当麻寺の中將姫」との奇妙な接近は、何ゆえであろうか。

## 第三節 実方中將の子熊野別当と中將姫

在五中將（在原業平）は、「身をえうなき者に思ひなして」（『伊勢物語』九段）東の国へ、さらには「陸奥の国に」（同、十四・十五段）流離う。あるいは『源氏物語』の明石入道は「近衛の中將を捨て、」明石に住み着いた。中將実方もまた然りであった。

角川源義は、語り物文芸の管理者には、そのような「敗北者」を好んでとりあげ、「その流浪を語る」ものが多いとし、「いつしか管理者自身がその末裔と称するように」なったとも述べている。<sup>注14</sup> 中將実方の伝承者は誰だろうか。

『保元物語』巻二に、源為義の婿となった熊野別当教真は「実方中將の末裔」と伝えている。そこで『熊野別当代々木』をみると、第十代別当泰敬（泰救）は「父ハ実方中將、母奥ノ国ノ人也。治山廿年」（長保元年正月二日補任）と記す。また『尊卑分脈』には「実方子」として「熊野別当長快―熊野別当湛快―実ハ源為義ノ子湛増―湛祐―源湛」の系譜を記す。すなわち、『保元物語』や『源平盛衰記』など、「源平の戦い」をめぐる文芸の管理者は、熊野別当を中心とする人々であったのなら、また、中將実方の陸奥国流浪や、その娘中將姫の流浪を語るのも、ほかならぬこの熊野文芸の唱

導者達であったのではなからうか。

冒頭の謡曲『当麻』の記述の冒頭で、熊野詣の帰途、念仏僧が当麻寺に立ち寄った、とする設定だが、おそらく弘安九年（一二八六）に、河内の聖徳太子御廟から当麻寺へ詣でた「念仏聖」、一遍上人（「一遍聖絵」八）の投影注15であろう。つまり当麻寺は、「一遍と時宗」を背景に、当初から、極めて深い関係をもっていたことになる。そして「熊野」もまた一遍が神託を受け、開眼した地であった（「一遍上人絵伝」。死後の往生を証明する熊野本社注16の「証誠殿の大神」は、また阿弥陀如来であるとも考えられていたからである。

和歌山県の熊野三社（熊野三山・熊野三所権現とも）は、田辺市本宮町の熊野本宮大社（祭神家都美御子大神）・新宮市の熊野速玉大社（祭神速玉之男命）・那智勝浦町の熊野那智大社（祭神熊野夫須美大神）である。人々は、①熊野詣、②熊野神社勧進と奉斎、という形で熊野を信仰したが、ご祭神の奉斎も仏教によることが多く、本地仏（本宮⇨阿弥陀如来・新宮⇨葉師如来・那智⇨千手観世音菩薩）への法楽、という形で、熊野信仰は「蟻の熊野参り」と言われるほどに流行したのである。

大峰・吉野・熊野・葛城・羽黒・彦山などを「抖擻行脚トウサツギョウカ（⇨難行苦行の目的で乞食行脚すること）」する山伏は、山中他界観に基づく修験を行って諸国を勧進した。文覚上人の那智の滝での荒行（『平家物語』巻五）や、壇ノ浦の戦いと熊野水軍など、熊野は深い関わりを持ち、熊野の山伏は、『義経記』『源平盛衰記』などの語りにも関わったと考えられる。

鎌倉時代中期以降、熊野三山を統括していた熊野別当が形骸化すると、三山はそれぞれ独立した活動をしようになる。そういった勧進所から、また、起請文として信仰された「牛王宝印」を配札し、編木ヒキモノを摺りながら地獄・極楽や、女性の救済を説いた「十界曼荼羅」の絵解きをし、時には『曾我物語』なども語る「熊野比丘尼」「歌比丘尼」が勧進の旅に出た。白い烏帽子、直垂や小素襖姿、雉・山鳥の羽の付いた小枝で曼荼羅の絵解きをする熊野比丘尼は、それまでの全国各地の巫女的な漂泊女性を拒まず取り込んで組織化したものと考えられている。しかしながら熊野三山の衰退とともに、江戸中期以降は、眉も剃らず、白歯のまま、紅・白粉をつけて色をひさぐ「売春比丘尼」をも生んだという（以上、筆者要約『日本風俗史事典』一九九四、弘文堂）。

神と人との仲介者であった「中臣」氏。『万葉集』に見える「中皇命」（⇨宝皇后・間人皇女・倭姫女王説）の真意。宗教的神人として諸国を廻国した女性集団「中寿」「中宣」。文芸伝承での「在五中將業平の旅『伊勢物語』」「中將実方の陸奥行『古事談』」「中將姫の流浪『古今著聞集』巻二・『御伽草子』・『元亨釈書』巻二十八など）」「近衛中將を捨てた明石入道『源氏物語』」「奥州に流された有宇中將の血筋を引く小野猿麻呂伝承（柳田國男『神を助けた話』一九二〇、柳田集十二卷所収）」など、枚挙に暇がない。そこに共通するのは、「中」「中將」である。

東北の月山・湯殿山を修行の場とした熊野修験者、その出自を「実方中將」とする熊野別当の系譜からみて、中將実方の伝承には、

この熊野修験の唱導があったと思われる。そして、陸奥国の《もう一人の中将姫》伝承、《当麻寺中将姫と同じ出自の阿古屋姫》が、今、陸奥国萬松寺に、中将実方―中将姫―阿古屋姫と、並んで祀られる背景には、同じ女人の身で流浪した神人、熊野比丘尼自身の姿の投影があったのではなからうか。「当麻曼荼羅」と「熊野本地曼荼羅・熊野垂迹曼荼羅、比丘尼の絵解きした十界曼荼羅」など、《神と人との仲介者》《神を祀る者の系譜》を持つ者の命名が、ほかならぬ《中将》であるように、《中将姫伝承》も、この民俗的な呪縛を逃れられずに、形成されたものと思われる。

### 【注記】

注1 『尊卑分脈』第二篇の系図にも、「従一位右大臣豊成号横佩大臣薨横佩境内之故也云々」の「女子」として「当麻寺曼荼羅本願号中将姫」と記す。

注2 宇宙の真理を表わすために、仏・菩薩を一定の枠の中に配置し、図式化したもの。ユング（一八七五―一九六一）はチベットの大なる解脱の書『死者の書』や『無量寿経』の影響を受け、心の全体像を表わすものとして、マンダラを描いている。

注3 清田弘『能の表現―その魅力と鑑賞の秘談―』二〇〇四・草思社も、「これを中将姫の化身と解するには無理がある」としている。

注4 近藤雅尚『中将姫伝説』（『日本神話・伝説総覧』一九九三・新人物往来社）。

注5 岩下 均『歴史と風土』『万葉集の民俗学』櫻井満監修、所収、一九九三・桜楓社。

注6 折口信夫『七夕祭りの話』では、「二上山の麓に神聖な女性が神に

仕へて居たと謂ふ考へ」が古くあったか、と論じている（『全集』十卷所収）。

注7 櫻井満『万葉集の名義と成立』『現代語訳対照万葉集』上巻・一九七四・旺文社。

注8 櫻井満『万葉集の風土』一九七七・講談社現代新書。

注9 河上邦彦『石光寺の歴史的位置付け』『当麻石光寺と弥勒仏概報』一九九二・吉川弘文館。

注10 田中日佐夫『二上山』一九六七・学生社。

注11 折口信夫（釈道空）の小説『死者の書』は一九三九年一月―三月『日本評論』連載。改訂版が一九四三年九月青磁社刊。さらに一九四七年七月角川書店刊。一九五五年六月『折口信夫全集』中央公論社所収、一九七四年五月中公文庫刊。一九九九年六月新版刊。新版で川本喜八郎は、それまでの「最高」の評価を「無比」に、すなわち「明治以降の日本近代小説の無比の成果」と評した。

注12 『八雲』三、一九四四・七『全集』二七卷所収。

注13 岩下 均『中将の旅―藤原実方の場合―』『目白学園女子短期大学研究紀要』第二十三号・一九八六。

注14 角川源義『語り物文芸の発生』一九七五・東京堂。

注15 伊藤正義校注『新潮日本古典集成 謡曲集 中』一九八六・新潮社。

注16 元目白大学教授、海老沢成亨から、山形県東田川郡櫛引町黒川の『黒川能狂言百番』にも「当麻」が重要な位置を占めていることを貴重資料とともに示された。筆者も、かつて山形県熊野神社学術調査（古典と民俗学叢書Ⅱ『宮内熊野の獅子祭り』一九七八・白帝社）で「熊野の獅子頭」を考察したが、東北には「廻国した熊野修験」の関与の徴証が様々に確かめられるのである。

（平成26年11月4日受理）